

中山間地域在住高齢者における地域愛着への関連要因

矢庭さゆり¹⁾*・矢嶋裕樹¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2021年12月1日受付、12月22日受理)

本研究は、中山間地域在住高齢者の地域愛着に関連する要因を明らかにするために1,182名を対象に質問紙調査を実施した。地域愛着を目的変数とするロジスティック回帰分析により検討した結果、男性は、「互いに助け合っている」「地縁的活動への参加頻度が高い」「学歴が高い」ほど、地域愛着が高かった。女性は、「互いに助け合っている」「互いに信頼している」「自覚的健康度が高い」ほど、地域愛着が高かった。市中心部は「互いに助け合っている」「地縁的な活動への参加頻度が高い」「学歴が高い」ほど、市周辺部は「互いに信頼している」「自覚的健康度が高い」「互いに助け合っている」ほど、地域愛着が高かった。地域への愛着形成には、男性では地縁的活動を促進すること、女性では近所との日常的な関わりの機会を増やすこと、市中心部では地縁的な活動に加えて、互いに助け合っていると実感できる機会を提供すること、市周辺部では近所との信頼感を醸成することの重要性が示唆された。

(キーワード) 中山間地域、高齢者、地域愛着

緒言

近年、住民間の健康行動を促し、Well-beingを向上させようとする要因として、地域への愛着が注目されている。とりわけ、人口減少・過疎化を背景に、住民間の関係性の希薄化が進む中山間地域においては、居住地域への愛着形成を図ることがその地で豊かに暮らし続けていくために求められている。地域への愛着が介在することにより健康行動や健康レベルに変化が起り、その恒久性が担保される¹⁾ことも示されており、今後の公衆衛生看護を考える視点の一つと考えられる。

近藤ら²⁾は、ソーシャル・キャピタル研究において、その構成する3要素である一般的信頼感、互酬性の規範、水平組織に加えて、地元に対する個人の認識として地域への愛着の程度を問う調査項目を加えている。ソーシャル・キャピタルの高さと地域愛着の関連も強いことから、いかに地域愛着を高めていくかについて関心が向けられている。地域愛着は、日常生活圏における他者との共有経験によって形成され、社会的状況との相互作用を通じて変化する、地域に対する支持的意識であり、地域の未来を志向する心構え³⁾と定義される。地域愛着は、元々地域に長年居住することで高まるとも考えられるが、そうではなくとも地域の近隣の方々との交流や、地区活動を通して高めていくことが可能な感情のように感じる。逆に長年居住しているが地域に対する愛着を感じないまま暮らしている状況も想定される。肯定的な地域愛着への感情は、日々の生活を通し

て内面に湧き起こるものであり、時とともに変化するとも考えられる。地域愛着はく人ととのつながりを大切に思う<>生きるための活力の源<>自分らしくいられるところ<>住民であることの誇り<>という4つの意味で構成される³⁾と考えられており、実際に、地域住民との交流を通じて地域愛着が生まれ、生活の質の向上と地域の問題解決力が高まる³⁾ことが示唆されている。

しかし、地域愛着そのものに焦点をあてた研究は報告されておらず、どのような関りや交流が地域愛着に影響するのかについて十分明らかにされていない。年々過疎化を背景に、住民間の関係性の希薄化が進むとされる中山間地域において、住み慣れた地域での今後の高齢者支援を検討していくうえで、地域愛着の状況、関連する要因について把握する必要性を感じる。そこで本研究では、中山間地域に居住する高齢者を対象に、地域愛着に関連する要因を明らかにすることを目的に研究に取り組むこととした。中山間地域の高齢者を対象に地域愛着に関連する要因を男女別、居住地域別に明らかにすることは、今後の高齢者の望む地域での暮らしを実現させる支援について検討する基礎資料になり得ると考える。

方法

1. 対象地域と対象者

調査対象地域として新見市を選定した。新見市は岡山県の北部に位置し、全域が中国山地の脊梁地帯に属する起伏

*連絡先：矢庭さゆり 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

の多い中山間地帯である。総面積は793.27km²である。主な産業は石灰産業や農林業などである。平成16年に新見市と阿哲郡4町(神郷町、哲西町、哲多町、大佐町)が合併し現在の新見市をなしている。平成27年国勢調査⁴⁾によると、調査対象地区である新見市内の人口は30,658人(男性14,596人、女性16,062人)であり、当時の高齢化率は38.6%で全国の27.3%より高い。年々、人口の減少による過疎化と高齢化が進む典型的な中山間地域の自治体である。

本調査では、平成27年度新見市内の国勢調査区54区から1/10の確率で選挙人名簿から無作為に抽出した65歳以上の高齢者1,182名(65歳以上人口の10.0%相当)を調査対象とした。研究デザインは横断研究、調査は、郵送法による自記式質問紙調査により実施した。調査票は調査対象者宅へ直接郵送した。記入済み調査票は、(調査時に配布した)返信用封筒に対象者みずから厳封のうえ、指定の期日までに実施機関宛へ返送してもらうことで回収した。調査実施期間は、2018年5月上旬から下旬にかけての約1ヶ月間であった。

2. 調査内容および分析に用いた変数

調査内容は、基本属性として、性、年齢をはじめ、居住地域(中心部・周辺部)、居住年数、健康状態、外出頻度、自覚的健康度、暮らし向き、最終学歴、近隣の信頼関係、近隣の助け合い、地縁的活動への参加、地域愛着とした。分析のために使用した変数とその測定方法については以下のとおりである。

1) 地域愛着

「あなたは現在お住まいの地域にどの程度愛着がありますか。」に対し、「とても愛着がある」から「まったく愛着がない」までの5件法で回答を求めた。分析にあたっては、「1：とても愛着がある」と「2：まあ愛着がある」を「愛着がある」、「3：どちらかともいえない」から「5：まったく愛着がない」を「愛着がない」にそれぞれ回答を2区分に併合した。

2) 近隣の信頼関係・助け合い

近隣の信頼関係については、「ご近所の人々は、互いに信頼し合っていると思いますか」と尋ね、「そう思わない」から「そう思う」の5件法で回答を求めた。分析にあたっては、「1：そう思わない」から「3：どちらともいえない」を「信頼していない」、「4：どちらかというと思う」と「5：そう思う」を「信頼している」にそれぞれ回答を2区分に併合した。また、近隣の助け合いについては、「ご近所の人々は、お互いに助け合っていると思いますか」と尋ね、「そう思わない」から「そう思う」の5件法で回答を求めた。分析にあたっては、「1：そう思わない」から「3：どちらともいえない」を「助け合っていない」、「4：どちらかというと思う」と「5：そう思う」を「助け合っている」にそれぞれ回答を2区分に併合した。

3) 地縁的活動への参加

「地縁的な活動」については、「あなたは現在、地域において地縁的活動(自治会、町内会、婦人会、老人会など)をどれくらいされていますか」と活動頻度を尋ね、それぞれ「1：活動していない」から「7：週に4日以上」の7件法で回答を求めた。分析の際は、「1：活動していない」を「活動していない」、「2：年に数回程度」は「低頻度」、「3：月に1回程度」以上を「高頻度」にそれぞれ回答を3区分に併合した。

4) 基本属性、その他

対象者の年齢、居住地域(中心部:旧市内・周辺部:旧市外4町)、最終学歴(小・中学校、高等学校、専門学校・短大・高専、大学・大学院)、暮らし向き(かなり苦しい、苦しい、ふつう、やや余裕がある、余裕がある)、外出頻度(まったく外出しない、月に1~3回は外出する、週に1回以上は外出する)、自覚的健康度(よくない、あまりよくない、ふつう、まあよい、よい)、居住年数(10年未満、10年~30年未満、30年以上)について尋ねた。

3. 分析方法

統計解析には、各項目に欠損値のない563名のデータを用いた。地域愛着の関連要因を明らかにするため、地域愛着(0：低い、1：高い)を目的変数、年齢、自覚的健康度、暮らし向き、最終学歴、近隣の信頼関係、近隣の助け合い、外出頻度、地縁的活動への参加を説明変数とするロジスティック回帰分析を男女別、居住地域別に行った。データの集計及び解析には、統計解析パッケージIBM SPSS Statistics 21 J for Windowsを使用した。検定の際の有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

対象者には、書面にて本研究の目的と内容について事前に説明し協力を依頼した。調査票の表紙および依頼状には、研究の趣旨、研究協力中断の保証、匿名性の確保、守秘義務、得られたデータを研究以外の目的に使用しないことを明記した。また、研究者の連絡先を依頼状および調査票の表紙に記し、調査に関する疑問について随時対応することを保証した。記入済み調査票は、プライバシー保護のため、個別封筒に厳封されたのち、郵送により回収した。調査票への回答および返送をもって調査協力への同意が得られたものとした。また、記入済み調査票はID番号で管理し、調査票から得られた情報はすべて統計的に処理し、個人の特定できないように配慮した。なお、本調査は新見公立大学倫理委員会の承認を得たのちに実施した(承認番号：130)。

結果

1) 対象者の属性等

最終的に731人(回収率61.8%)から回答が得られた。そのうち、分析に用いる各項目に欠損値のない563名のデータを分析を行った。

対象者の基本属性等の分布を表1に示した。対象者の性

表 1. 対象の基本的属性等の分布

		n	%
性別	男性	259	46.0
	女性	304	54.0
年齢	平均±1標準偏差	73.9±6.7歳	
	前期高齢者(75歳未満)	323	57.4
	後期高齢者(75歳以上)	240	42.6
居住地域	中心部(旧市内)	347	61.8
	周辺部(旧市外)	216	38.4
居住年数	10年未満	15	2.7
	10年から30年未満	56	9.9
	30年以上	492	87.4
暮らし向き	苦しい	121	21.5
	ふつう	343	60.9
	ゆとりがある	99	17.6
最終学歴	小・中学校	168	29.8
	高等学校	278	49.4
	それ以上	117	20.8
外出頻度	週1回未満	139	24.7
	週1回以上	424	75.3
近隣の信頼関係	信頼している	304	54.5
	信頼していない	254	45.5
近隣の助け合い	助け合っている	329	58.8
	助け合っていない	231	41.3
地縁的活動	していない	142	28.4
	している(低頻度)	191	38.2
地域愛着	している(高頻度)	167	33.4
	低い	107	19.1
	高い	454	80.9

別構成は男性46.0%、女性54.0%、平均年齢は男性が73.2±6.5歳、女性が74.5±6.5歳、73.9±6.7歳であった。なお、前期高齢者(65歳以上75歳未満)は57.4%、後期高齢者(75歳以上)は42.6%であった。居住地域は中心部が61.8%、周辺部が38.4%であった。居住年数は30年以上が87.4%、最終学歴は「高等学校」以上が49.4%、暮らし向きは「ふつう」以上が78.5%であった。

外出頻度は、週1回以上が75.3%であり、近隣の人々の助け合いについては、「助け合っている」が58.8%であり、近隣の人々の互いの信頼については「信頼している」は54.5%で「信頼していない」を若干上回る結果であった。地縁的活動については、「月に1回以上活動している」と答えた人は33.4%であった。

2) 地域愛着に関連する要因

地域愛着が高い人は全体では454名(80.9%)、低い人は107名(19.1%)であった。男女別、居住地域別に行ったロジスティック回帰分析の結果、男性では、互いに「助け合っている」(OR= 5.06)、地縁的活動への参加頻度が「高い」(OR=3.46)、学歴が「高い」(OR=3.17)ほど、地域愛着が高かった。一方、女性では、「互いに助け合っている」(OR=4.23)、互いに「信頼している」(OR=3.17)、自覚的健康度が「高い」(OR= 2.98)ほど、地域愛着が高かった(表2)。

地域別に分析した結果では、中心部では互いに「助け合っている」(OR= 6.91)、地縁的活動への参加頻度が「高い」(OR= 3.31)、学歴が「高い」(OR=2.59)ほど、周辺部において互いに「信頼している」(OR =4.67)、互いに「助け合っている」(OR= 3.23)、自覚的健康度が「健康である」(OR= 3.69)ほど、地域愛着が高かった(表3)。

表 2. 男女別地域愛着に関連する要因 (ロジスティック回帰分析)

変数	参照カテゴリー	男性				女性			
		オッズ比	95% 信頼区間		p	オッズ比	95% 信頼区間		p
			下限	上限			下限	上限	
性別(女性)	男性	.530	.244	1.147	.107	.631	.242	1.647	.347
年齢(後期高齢者)	前期高齢者	.854	.353	2.069	.727	2.144	.912	5.039	.080
世帯状況(独居以外)	独居	2.114	.624	7.160	.229	.886	.312	2.511	.819
暮らし向き(ふつう)	苦しい	1.574	.579	4.282	.374	1.564	.591	4.139	.368
暮らし向き(ゆとりがある)	苦しい	.501	.141	1.780	.285	.624	.175	2.226	.468
最終学歴(高等学校)	小・中学校	3.176	1.047	9.635	.041	1.060	.424	2.647	.901
最終学歴(それ以上)	小・中学校	1.015	.301	3.423	.981	.687	.222	2.127	.514
自覚的健康(健康である)	健康でない	2.234	.826	6.038	.113	2.984	1.328	6.702	.008
近隣信頼関係(している)	していない	2.169	.685	6.874	.188	3.176	1.276	7.904	.013
近隣助け合い(している)	していない	5.065	1.539	16.665	.008	4.234	1.768	10.139	.001
地縁的活動(低頻度)	していない	3.465	1.207	9.943	.021	1.958	.775	4.947	.155
地縁的活動(高頻度)	していない	1.975	.626	6.225	.245	1.724	.638	4.659	.283
外出頻度(週1回以上)	週1回未満	.959	.320	2.879	.941	.960	.415	2.221	.923
定数		.012			.006	.044			.011

目的変数:地域愛着(0:地域愛着が低い 1:地域愛着が高い)

表3. 地域別地域愛着に関連する要因 (ロジステック回帰分析)

変数	参照 カテゴリー	中心部				周辺部			
		オッズ比	95% 信頼区間		p	オッズ比	95% 信頼区間		p
			下限	上限			下限	上限	
性別(女性)	男性	.530	.244	1.147	.107	.631	.242	1.647	.347
年齢(後期高齢者)	前期高齢者	2.191	.970	4.947	.059	.782	.286	2.141	.633
世帯状況(独居以外)	独居	.911	.344	2.410	.850	1.181	.323	4.316	.801
暮らし向き(ふつう)	苦しい	.983	.399	2.422	.971	2.515	.841	7.523	.099
暮らし向き(ゆとりがある)	苦しい	.413	.129	1.326	.137	.614	.124	3.045	.551
最終学歴(高等学校)	小・中学校	2.591	1.060	6.331	.037	.774	.253	2.365	.653
最終学歴(それ以上)	小・中学校	.951	.332	2.723	.926	.501	.138	1.818	.293
自覚的健康(健康である)	健康でない	2.220	.985	5.005	.054	3.698	1.369	9.988	.010
近隣信頼関係(している)	していない	1.823	.750	4.430	.185	4.674	1.411	15.479	.012
近隣助け合い(している)	していない	6.915	2.638	18.128	.000	3.232	1.092	9.567	.034
地縁的活動(低頻度)	していない	2.338	.957	5.711	.062	2.819	.853	9.314	.089
地縁的活動(高頻度)	していない	3.311	1.171	9.364	.024	1.347	.440	4.123	.601
外出頻度(週1回以上)	週1回未満	.999	.416	2.401	.998	.938	.334	2.633	.903
定数		.075			.049	.045			.038

目的変数:地域愛着(0:地域愛着が低い 1:地域愛着が高い)

考察

本研究は中山間地域の高齢者を対象として、地域への愛着に関連する要因を明らかにすることを目的に、男女別および居住地域別にその関連を検討した。その結果、男性においては、「近隣が互いに助け合っている」、「地縁的活動への参加頻度が高い」、「学歴が高い」ほど、地域愛着が高い結果である。女性においては、「近隣が互いに助け合っている」、「互いに信頼している」、「自覚的健康度が高い」ほど、地域愛着が高い。周辺部の地域では、「互いに信頼している」、「近隣が互いに助け合っている」、「自覚的健康度が高い」ほど地域愛着が高く、中心部は「近隣が互いに助け合っている」、「地縁的な活動への参加頻度が高い」、「学歴が高い」ほど、地域愛着が高い。これらの結果は、年齢、世帯状況、暮らし向き、居住年数を調整したのちも変化はないことを確認している。

本研究の対象は、30年以上この地域に居住している人が8割を超えている。住み慣れた地域の物理的環境に居ることで愛着が高いとも思えるが、先行研究において、地域の物理的環境および「近所づきあいがある」、「自分の友達や話し相手がいる」など社会的環境に対する評価が高い人ほど地域に対する愛着が強いこと、社会的環境に対する評価は物理的環境に対する評価に比べて、より愛着を高めうること、地域環境に対するこれらの評価は、居住年数以上に愛着形成を促す⁵⁾ことが明らかにされている。これらのことを考えると、確かに居住年数の高い集団ではあったものの、慣れ親しんだ物理的環境のもので、どう暮らしているかが重要であると考えられる。物理的環境以上に近隣の助け合いや近隣との信頼関係を認識し、評価していることが地域愛着を醸成している結果といえる。

また、今回の調査では男女で地域愛着について若干の違いがみえている。「互いに助け合っている」に関しては、男女ともに地域愛着を高める要因ではあるが、男性においてより特徴的に表れている。また、男性では、自治会、町内会、婦人会、老人会、消防団、ボランティア・NPO・市民活動等の地縁的な組織の活動に参加しているほど、地域愛着が高い。さらに本研究において、男性の要因としてあがる「学歴が高い」、「地縁的活動への参加頻度が高い」については、他の社会活動に関する研究でも明らかにされている点である。教育年数が短い者、暮らし向きを苦しいと感じる者は、友人の数および社会活動の認知が低水準で社会的に孤立している⁶⁾ことが報告されている。義務教育のみの人より義務教育以上の教育を受けた人は、元々ソーシャルネットワークを多く持つことや社会関係を築く場についての情報源を多く持っていることが考えられる。実際に、義務教育以上の学歴を有し、現役時代に社会的役割を幅広く担うことで、退職後の公民活動等地域活動への貢献をしている人も地域に多く存在する。

一方、男性に比較し、女性は地縁的な活動よりは、「互いに信頼している」、「自覚的健康度が高い」ことが地域愛着を高める結果である。古くから中山間地域では、近所づきあいとして近隣住民と密に交流する機会が女性は男性に比べて多い。女性にとっては特に近隣住民との交流を通して信頼関係が築かれることにより、地域愛着が高まる⁷⁾ことが考えられる。それらの近所づきあいは自分自身が健康でないと担うことができない。

次に、周辺部の地域では、「互いに信頼している」、「近隣が互いに助け合っている」、「自覚的健康度が高い」ほど地域愛着が高い。周辺部は旧新見市外4町であり新見市合併前は、各人口が約2500~3,000人程度の町である。中心部に

比較し、山間部に位置する。昔ながらの地域づきあいが残っており、信頼感、助け合いについて要因に上がっていることが考えられる。中心部に比較し交通手段等も不足し、外出等にも不便な地域もある。様々な活動や交流を行うにも健康という要素が重要となる。

中心部は「近隣が互いに助け合っている」、「地縁的な活動への参加頻度が高い」、「学歴が高い」ほど、地域愛着が高い。地縁的な組織の活動に参加しているほど、地域愛着が高い結果であるが、先行研究においても同様に、自治会、町内会、婦人会、老人会、消防団、ボランティア・NPO・市民活動等の活動に参加している人の精神的健康が高い傾向にある⁷⁾ことが示唆されている。地縁的な組織の活動に高頻度に参加している高齢者は、そうでない高齢者と比べて、地域愛着とともに精神的健康が高い水準に保たれていることが考えられる。また、地域への愛着の度合いが強い人ほど、近所に信頼できる人がいる人ほど幸福度が高い⁸⁾ことから、幸福度を増すには、地域の愛着心の醸成と地域住民との交流の促進が課題となる。

以上、本研究結果から地域愛着の関連要因は、男女および中心部・周辺部で異なる可能性があり、地域への愛着形成には、男性では地縁的活動を促進すること、女性では近所との日常的な関わりの機会を増やすこと、中心部では地縁的な活動に加えて、互いに助け合っていると実感できる機会を提供すること、周辺部ではできるだけ近所との交流する機会を持ち信頼感を醸成することが重要と考えられる。男女問わず、自分に合った地域組織活動への積極的な参加を促進することや地縁的活動への参加や日常的に関わる機会を増やすことができる場をつくることなどの取り組みが必要であると考えられる。

今後は、地域愛着の形成に着目し、今回の対象よりも若い世代に視野をひろげ、退職前の地域活動を通じた情動体験や地域の人々との交流を実感できる経験が必要と考える。地域愛着の醸成、形成について、個人レベルの幸福度や精神健康の維持向上から、地域づくりへと発展しうる可能性が考えられる。

本研究の限界と課題

本研究は、一中山間地域を対象とした横断研究である。対象をひろげて若い世代の地域愛着に関する関連要因についても明らかにしていきたい。併せて今回は市町村合併後の旧市内と旧市外で比較をしたが、都市部との地域愛着の関連要因とは異なる可能性がある。今後は、都市部との地域愛着に関する関連要因について検討していきたい。

謝 辞

本研究にご協力を賜りました新見市の皆様に深く感謝

いたします。本研究の結果公表に関し、開示すべき COI 関係にある企業などはありません。なお、本研究は平成27年度～30年度 科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号 JP15K21304）の助成を受けて行われた。

文 献

- 1) Carpiano R.M.: Actual or Potential Neighborhood Resources for Health, In Kawachi I, Subramanian S.V., Kim D. (eds.): Social Capital and Health (1st ed.), Springer Science+Business Media LLC, New York, 83-93, 2008.
- 2) 近藤克彦：検証「健康格差社会」、介護予防に向けた社会疫学大規模調査. 医学書院, 2007.
- 3) 大森純子, 三森寧子, 小林真朝, 他：公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析. 日本公衆衛生看護学会誌, 3(1), 40-48, 2014.
- 4) 総務省統計局: e-Stat平成27年度国勢調査, [インターネットOnline], [2021.12.20] <https://www.e-stat.go.jp>
- 5) 引地博之, 青木俊明, 大淵憲一: 地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響. 土木学会論文集, 65 (2), 101-110, 2009.
- 6) 岡本秀明: 都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討: 地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて. 社会福祉学, 53(3), 3-17, 2012.
- 7) 矢嶋 裕樹, 矢庭 さゆり: 中山間地域高齢者のソーシャル・キャピタルと精神的健康の関連. 新見公立大学紀要, 39, 23-29, 2018.
- 8) 小谷みどり：人づきあいと幸福度との関係. Life Design REPORT Winter, 16-23, 2013.